



Title	「橋をかける」文学者たちの戦前と戦後――中国文学研究会メンバーの精神史研究
Author(s)	高, 磊
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/93052
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 高 磊 ）	
論文題名	「橋をかける」文学者たちの戦前と戦後 ——中国文学研究会メンバーの精神史研究
論文内容の要旨	
1934年、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫三人を中心に、日本最初の中国現代文学を研究する組織である中国文学研究会が創設された。この研究会が設立した時代は、日本が国内に対する思想統制を強めると同時に、中国本土への侵略を正当化するために「日中親善」の建前を利用していた時代である。研究会の中心メンバーの三人は、多かれ少なかれ左翼運動に参加した経験を持ち、政治運動の敗退から「文学的」に再出発し、研究活動を始めたのである。研究会は会報『中国文学月報』（1940年に『中国文学』と改題した）を発刊し、日本伝統の漢学研究を批判し、中国現代文学の翻訳と紹介を行い、同時代の中国人と交際し、日中両国の間に「橋をかける」ことを志した。1943年、時局に抵抗するために、竹内は研究会の解散と会報の廃刊を決めた。戦後、岡崎と研究会の他のメンバーを中心に、会報が復刊した。だが、竹内はその復刊を批判し、後に『中国文学』に拘らず、魯迅と現代中国研究の専門家として戦後日本のジャーナリズムの世界で活躍し始めた。武田も小説を創作し始め、中国文学研究者から戦後作家へ転身した。中心メンバーの三人は戦後、異なる道を歩み出した。本研究は、中国文学研究会の中心メンバーの三人が行った、政治実践の代わりとしての文学研究の内実を考察し、彼らが戦前と戦後に、中国文学研究を通じて時局、政治に抵抗した過程を明らかにしたものである。本研究はまた、共通な出発点を持つこの三人の文学研究におけるそれぞれの関心と個性を検討し、戦後の彼らが異なる道を歩んだ理由を究明した。 第一章では、中国文学研究会が世に出る契機となった1934年の周作人歓迎会の詳細を考察し、この歓迎会を例として研究会の初期の活動と時局、政治との関わりを明らかにした。中国文学研究会が主催する周作人歓迎会は、日中親善の文化外交の成果として報道された。同時代中国との本物の文化的交流を目指したとはいえ、竹内らは1930年代の日本の厳しい政治的空氣の圧力を受け、やむを得ず日中親善という政治的建前の下に活動を展開していた。この後周作人が「漢奸」になった運命を見届け、戦後の武田は歓迎会を振り返り、そこから「共犯者じみた緊張」と、外国文学研究者の役割の難しさを感じ取った。周作人歓迎会は、その運命のプロローグのように、後に中国文学研究会メンバーが政治の渦に引きずり込まれることをも暗示していた。 第二章からは竹内、武田、岡崎三人の研究に対する個別の考察を行った。まずは第二章で、竹内の高校時代の経験や、中国文学研究会の設立前後から1937年までの竹内の文学研究の初期を検討した。高校時代の竹内は左翼運動に対して共感しながら距離を置く態度を持つ。後に東京帝国大学支那文学科に入学した。1932年に初めて北京に留学した時、竹内は「文学は一民族の生活感情の総和である」という考えを形成し、文学を通じて中国人の心を掴むことを志した。卒業論文の中で、竹内は郁達夫を研究対象として、郁から自分の芸術を政治、革命から守り抜く精神を読み取った。1934年、竹内は中国文学研究会を設立し、権力迎合の漢学と「人間不在」のプロ科による中国研究を批判し、学問領域において時局への抵抗を行った。この頃、竹内は小品文を通して中国文壇における「政治と文学」の対立を把握し、中国文学が「国民的統一」を形成していく過程に注目し、そこから左翼文学運動で挫折した日本文学を考え直す契機を見つけようとしたのである。 第三章では、武田の転向体験と戦場体験に基づいた研究書『司馬遷』における、中国文化認識論的意義を論じた。武田は高校時代から左翼運動に参加し、数回逮捕され、政治的に挫折した。中国文学研究会の一員として活動する頃、武田は人類学、民俗学、民間文学などの分野への興味を示し、「人間」の「生活意識」を重視している。兵士として中国戦場へ派遣された頃にも、武田は本物の中国研究が中国人の日常生活にあると信じ、また研究者の主體的な情熱と意志こそ文化のありかと悟った。それらの認識は、『司馬遷』の中で受け継がれた。『司馬遷』で武田は、「憤りを以て」歴史を「記録」する司馬遷の批判精神に倣い、文化的に時局に抵抗した。武田は、「政治的人間」が歴史を動かし、「多中心が並立する」世界の構想を提起し、日本伝統の皇国史観と西洋近代のマルクス主義史観を	

共に超えた。また、現実の中の中国と日本の関係を匈奴と漢王朝の關係に喩え、漢朝の文化人を批判し、匈奴の生活と文化を尊重し、認識することを主張した。このように武田は『司馬遷』で戦時下の日本における国策奉仕の中国研究への批判を行い、日本の研究者に自分なりの中国文化を研究する道を示したのである。

第四章では、「言葉」をめぐる竹内の論述を手掛かりにして、1936年から1943年までの7年間、竹内の文学観はどのように変化し、最終的に自分の文学体験が凝縮された著書『魯迅』における「言葉のない空間」に辿り着いたのかを論じた。竹内は最初は、自分の学問体系、いわば「自己の言葉」を求め、「中国文学」という言葉を掲げて伝統の学界への反旗を翻した。しかし、1938年に日本軍占領下の北京で留学する時、竹内は文化と政治の分かち難い関係を意識し、また「中国文学」という言葉で表現できない「茫漠たる実体」を感じ、今までの自分の研究の意義を疑った。にもかかわらず、周作人の「論語小記」から感銘を受け、竹内は高压な政治の下でも理想を遂行することを決めた。帰国後、竹内は中国文学研究会の改組と会報の方向転換を行い、国策便乗の中国研究と俗流の「文学」に抵抗しながら、新たな「言葉」を追い求めている。そして1942年に、竹内は中野重治の『斎藤茂吉ノート』から、態度と行為としての文学精神を悟った。以上の体験に基づいて、竹内は1936年の「魯迅論」における考え方を改め、1943年の『魯迅』で、晩年の魯迅が小説を「書かぬ」ことへの理解を示し、魯迅の文学の根源は「言葉」で定義できない「無」であり、一種の「態度、行為」であると指摘した。文学は「言葉」を超え、「無」になってからこそ、政治の支配から解放され、政治のために唱えられる偽物の「文学」に抵抗できる。このような理解に辿り着き、竹内は大東亜文学者大会への出席を拒否し、さらに中国文学研究会を解散し、研究会の居場所と魯迅文学の根源とを共に、「言葉のない空間」に求めたのである。

第五章では、竹内が主導する研究会の方針と比較する形で、岡崎の研究会における役割、独特な文学研究の姿勢、戦後文学観の深化及び竹内との分岐を明らかにした。左翼運動に参加して逮捕された岡崎は、運動から離れ、後に郁達夫文学によってようやく転向の苦境から脱け出した。中国文学研究会の一員として活動する頃、岡崎はジャーナリストとしての才能を発揮し、中国文学に関する情報を掴み、精力的に中国現代文学の翻訳を行った。戦前の岡崎は西洋文学から影響を受け、「文学そのもの」に執着し、中国文学に作家の「内面世界」への共感を求める。そのため、日中戦争勃発後、岡崎は最初は政治性に溢れる中国の抗戦文学を拒否した。竹内が研究会と会報の方向転換を行い、純粋に文学に関する内容を減らす時にも、岡崎は文学への未練を示した。しかし、後に日本の敗戦は岡崎に、侵略される弱い民族の悲しみに共感する契機を与えた。それによって、戦後の岡崎は中国文学における政治性を受け入れ、戦争に関する中国文学を翻訳し、中国作家の民衆への転身を賛成した。ただし、「文学そのもの」に対する岡崎の執着は戦後においても続いた。そのため、岡崎は「作家自身の精神」を重視し、同時代の中国文壇に行われている「反右派闘争」、「丁玲批判」などの事件における問題点を指摘し、作家は国民の代弁者になると主張する竹内と異なる考えを示した。

第六章では、『魯迅入門』を初めとする1946年から1948年までの竹内の魯迅研究を考察し、戦時下と戦後の竹内の魯迅論を繋ぐ『魯迅入門』の意義を検討し、戦後竹内の魯迅論と「回心」論はどのように発展し、1948年の名文「中国の近代と日本の近代」における思想に辿り着いたのかを論じた。日本の敗戦によって、竹内は弱国の一員である魯迅の「屈辱」に共感し、戦後の彼の重要な思想である「ドレイ」論を形成し、「ドレイ」状態から脱却するために日本文化を考え直し始めた。竹内はまた、戦後日本の民主主義文学運動に注目し、中野重治、宮本百合子などの作家から影響を受け、魯迅と民衆の繋がりと魯迅の反官僚意識を認識した。さらに、竹内は中野の森鷗外論から、「旧時代そのものの発展としての新精神成立の法則」を悟り、最終的に自分の魯迅論と「回心」論を、中国の近代化のパターンを説明し、日本の近代化を批判する参照軸として確立した。戦後の竹内はこのように魯迅に対する新しい認識を形成し、戦後日本のジャーナリズム界で評論家として活躍していく礎を築いた。

第七章では、中国文学研究会をモデルとした戦後の武田の小説『風媒花』における「中国離れ」の傾向を検討した。そこから、中国に対する武田の葛藤、竹内との分岐、また中国文学研究会への武田の自己反省を明らかにした。戦後の武田は中国文学から、日本文学が持っていない強靱さと抵抗精神を発見したが、彼は竹内と岡崎のように中国文学から敗戦後の日本を支える力を汲み取ることを選ばなかった。中国に対する罪悪感とコンプレックスによって、武田の中国文学研究者として立身する自信が動揺した。『風媒花』の中で、武田は自分の処女作『司馬遷』における多中心並立の思想を継承しながら超越し、小説という多声的な表現形式で著者の特権性を克服しようとした。征服者として上海で暮らしている時、武田は権力の恐ろしさを知った。そのため武田は、権力に結び付く戦後日本の翻訳ブームから距離を置き、竹内と岡崎と異なる方向を選んで、中国文学研究者から作家へ転身した。武田はまた『風媒花』で、三田村という日中混血の人物を通じて、日本の中国文学研究者の加害者としての本質を喝破し、竹内の国民文学論の主張と彼の中国研究の価値を問い直す。さらに、三田村における「殺人」主題と対決することで、武田は自分が中国で犯した罪を反省し、他人に激痛を与える責任を負うという希望を、日本の戦後世代に託した。

このように、武田は中国に対する自分の葛藤を解消し、日中関係の新時代に向かっていく。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (高 磊)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	准教授	今泉秀人
	副 査	教授	五之治昌比呂
	副 査	教授	林初梅
	副 査	准教授	劉文兵
	副 査	名誉教授	青野繁治

論文審査の結果の要旨

本論文は、1934年に日本で結成された中国現代文学の民間研究組織「中国文学研究会」の主要メンバーの中から、中心的存在であった竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三名を取り上げ、結成当初から戦後を通じて彼らの中国文学とその背景となる同時代の中国に対する認識を軸に、それぞれの思想の変遷を、時代の転変と運命（経歴）に即してトレースしたものである。組織研究を、成員個人の立場と個性を把握しつつ、人間関係のもつれをも視野に収めながら展開したことに大きな特徴を持つ。

第一章は、1934年に中国文学研究会の存在が世に知られるきっかけとなった周作人歓迎会を取りあげている。当時の国策を滲ませた「日華親善」の名目で文化外交の成果として報道されたこのイベントを当時の報道や関係者の回想などを綿密に調べ上げ、青年たちの同時代中国への興味と日本社会の政治的な思惑とのズレを描き出している。

第二章は、中国文学研究会の設立前後から1937年までの状況を、研究会のリーダー格であった竹内好の旧制高校時代の経験から説き起こし、東京帝国大学支那文学科入学、北京留学、卒業論文と続く中国の同時代文学への興味関心から研究会設立への内的発展を跡付けつつ論じている。

第三章では、研究会のもう一人の中心的存在である、後に著名な作家となった武田泰淳の、転向体験と戦場体験に基づいた著書『司馬遷』を基に、彼の学問的な中国への興味と現実体験がいかにして戦時下の日本における国策奉仕の中国研究への批判や独自の中国観の形成に繋がっていったのかについて明らかにした。

第四章では、再び竹内に目を向け、日中戦争時期の七年間にわたる彼の現代中国文学に対する考察の変化と深化を論じている。特に竹内が、彼の代表的著作『魯迅』において最終的に「言葉のない空間」という認識に辿り着いたプロセスを、竹内の言葉を丹念に拾い上げ検討することで解明した。さらに、この思想的な展開が、研究会という組織に、大東亜文学者大会への出席拒否、そして研究会の解散という実際的な行動となって影響した、と指摘している。

第五章では、中国文学研究会に関する先行研究の中で、これまでほとんど取り上げられ詳しく語られなかったもう一人の主要メンバー岡崎俊夫の研究会における独自の役割、ジャーナリストとしての独特な文学研究の姿勢、また日本敗戦後の彼の文学観の変化を、数少ない資料を駆使して丁寧に掘り起こしている。特に、研究会組織における戦後の竹内との分岐を明らかにできたことは新しい観点である。

第六章では、戦後の竹内に焦点を当てた。『魯迅入門』を初めとする1946年から1948年までの彼の魯迅研究を通じて、竹内の魯迅論と「回心」論との展開を論じた。戦後の彼の重要な思想である「ドレイ」観を皮切りに、最終的には、中国の近代化のパターンを参照軸として、それに対比する形で日本の近代化を批判する、戦後日本を代表する評論家としての竹内の中心的思想や立場を説明している。

第七章では、中国文学研究会をモデルとした戦後の武田の小説『風媒花』を詳細に分析することで、中国に対する武田の葛藤、竹内との分岐、また中国文学研究会への武田の内省を明らかにした。作家として戦後、独自の地歩を作り上げた武田の文学観の出発点を「中国離れ」をキーワードとしてつぶさに検証し、竹内や岡崎とは全く異なる方向を選び自己発展を遂げたその内面の転回を論じている。

本論文は、以上の章立てから、1930年代から戦後にわたる日中関係の転変の中で、文学がどのような影響を被り、それを研究者がどのように理解しようとしたのか、について、中国文学研究会という日本において稀有な組織の成立と内実を、その成員各個人へのかなり踏み込んだ調査・分析・記述を行い明らかにしたものであり、その結論には説得力がある。

著名な知識人として、これまで一定の研究蓄積のある竹内、武田については膨大な先行研究をよく整理・咀嚼し、自らの論の礎とし、その上で、これまでほとんど顧みられることのなかった岡崎という人物にスポットを当て、実証的な掘り起こしの作業を行いつつ、研究会という組織の中で彼が果たした重要な役割を浮かび上がらせることに成功した。特に戦後の三人の分岐と研究会の変化・消滅を、竹内・武田二者の分袂に依るのではなく、岡崎の発言を関することで、時代環境の変化とそれぞれの個性の伸長による分裂であったことを立体的に説明することができた。実証的な材料（史料）の積み重ねによるアプローチ（第1、2、5章）、作家の内在的な論理の展開を分析すること（第3、4、6章）、文学テキストの丁寧な読解（第3、7章）というように、その対象によって、文学研究の別々の手法を適材適所に十二分に活かした記述がなされていることも論文全体のダイナミクスに貢献している。

結論として、本論文は、これまでの個別作家研究や中国現代文学研究史の蓄積の上に新たな事実を積み上げたと言える意欲的な研究である。このように、本論文は着実な実証的手法と文学テキストに対する解釈を通じて、ひとつの組織の転変とその成員間における文学観の転回・発展を解明した優れた考察であり、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると評価した。